

## 医史学漫遊雑記

——平成28年度海上自衛隊遠洋練習航海随行者——

柳川 鍊平

明治以来の伝統を継承する海上自衛隊では、幹部候補生学校で約1年間の教育課程を修了した直後の初任幹部に対する実地訓練を主な目的として、毎年3月中旬から10月末頃にかけて、国内および遠洋において練習航海を行っている。年度毎に、世界一周、南米、環太平洋などから航路を選び、概ね10か国程度を訪問しながら、海上自衛隊の幹部として具備すべき、シーマンシップや国際感覚などの涵養を図る。見方によっては、世界に類を見ない極めて大掛かりな新人研修ともいえる。平成28年度の航海は海上自衛隊として第60回目の節目に当たり、航路は世界一周コースが選ばれた。練習艦隊（「かしま」、「あさぎり」、「せとゆき」）は3月中旬から約1か月強の国内巡航に続いて、5月20日から11月4日までの169日間で13か国・16寄港地（各艦としては11か国・14寄港地）を訪問した。これは同時に、1寄港地あたり72時間の停泊中は各国の海軍や在外邦人コミュニティと艦上レセプションや現地での歓迎行事などで交流しながら、残りの100日以上は訓練航海に費やされ、インターネットからも隔絶された数カ月を過ごすということを意味する。

演者は、平成28年3月から練習艦隊医務長を拝命し、練習艦「かしま」に乗組んで平成28年度の遠洋練習航海に随行者することになった。軌道に乗りかけた医史学研究の中断を余儀なくされる代わりに、今次航海を医史学フィールド実習の又とない機会として最大限に活用することを考え、「第一次世界大戦における海軍医療」を私的メイン・テーマに掲げて169日間を乗り切ることを決意した。

各寄港地での訪問先（医史学関係のみ）は以下の通り。

- 1 パール・ハーバー（アメリカ）  
Tripler Army Medical Center  
（トリプラー陸軍医療センター）
- 2 サン・ディエゴ（アメリカ）  
Naval Medical Center San Diego  
（サン・ディエゴ海軍医療センター）  
Maritime Museum of San Diego  
（サン・ディエゴ海事博物館）  
USS *Midway* Museum  
（空母ミッドウェイ博物館）
- 3 パナマ・シティ（パナマ）  
Museo del Canal Interoceanico de Panama  
（パナマ運河博物館）
- 4 ジャクソンビル（アメリカ）  
NASA Kennedy Space Center  
（ケネディ宇宙センター）
- 5 ボルティモア（アメリカ）  
Walter Reed National Military Medical Center  
（ウォルター・リード米軍医療センター）  
Library of Congress  
（米国議会図書館）
- 6 ロンドン（イギリス）  
Imperial War Museum  
（帝国戦争博物館）  
HMS *Belfast*  
（同別館 軍艦ベルファスト）  
St. Thomas' Hospital  
（聖トーマス病院）  
Florence Nightingale Museum  
（フローレンス・ナイティンゲール博物館）  
National Maritime Museum/Caird Library  
（国立海事博物館／ケアード図書館）  
Wellcome Library  
（ウェルカム図書館）
- 7 クライペダ（リトアニア）

- 特記すべき医史学的成果なし。
- 8 アントワープ (ベルギー)  
Queen Astrid Military Hospital  
(アストリッド女王ベルギー軍病院)  
In Flanders Fields Museum  
(イン・フランダーズ・フィールズ博物館)
- 9 ヴァレッタ (マルタ)  
旧日本海軍戦没者墓地  
Malta Maritime Museum  
(マルタ海事博物館)  
The National Library of Malta  
(マルタ国立図書館)  
The National War Museum  
(国立戦争博物館)
- 10 チヴィタヴェッキア (イタリア)  
Policlinico Militare di Roma  
(イタリア軍ローマ病院)  
Museo di Storia della Medicina, Sapienza  
Universita di Roma  
(ローマ大学医学史資料館)
- 11 ディブティ (ディブティ)
- 12 モンバサ (ケニア)
- 13 コロンボ (スリランカ)
- 14 マニラ (フィリピン)

何れにおいても特記すべき医史学的成果なし。

艦上レセプションや昼食会などの公式行事を含めて1寄港地あたり72時間という制約の下、航行中は各種検索サイトからも隔離され、出国直前

に横須賀のショッピング・センターで購入できた限りのガイド・ブックとダウンロード式の地図アプリだけを手掛かりに研修先を選び、現地外務省職員や駐在武官の皆々様の御支援を賜りながら、可能な限り施設訪問を詰め込んだつもりであったが、特にスエズ運河以降で病院見学の域を超えることは困難であった。しかし、パール・ハーバー入港からチヴィタヴェッキア出港までの間に、エボラ・ウイルス疾患対策、大量破壊兵器(CBRNE)対策、クリミア戦争での救護体制、四肢喪失兵士のリハビリテーション等々予防医学から治療医学、あるいは基礎・臨床・社会医学の垣根を超えた軍事医学の広大な地平を管見する機会に恵まれ、海軍の医療史を研究テーマに選んだ医史学入門者にとっては大変貴重かつ有益な収穫を得ることができた。

練習艦隊に配属された(未来の「提督」若干名を含む)約750名の健康を預かる練習艦隊医務長として相応の職責を担い、通算4通の死体検案書を作成しながらの長期航海ではあった。が、一社会人大学院生の立場では、寄港地での外食と日没後の外出とを慎むことで、日本国内に居ると同じ程度に安全な食と治安とを確保しながら、日本国内に居ては決して得られない(特に第一次世界大戦の)空気感を持ち帰ることができ、その後の研究に活かすこともできた。後者の立場に限れば、文字通り「渡りに舟」とも称しうる航海であったことは否定できない。

(平成30年5月例会)

## 書 評

見城悌治 著

### 『留学生は近代日本で何を学んだのか』

——医療・園芸・デザイン・師範——

「近代日本における留学生受け入れ史」という興味深く、特に東アジアの近代文化交流の源流と

その断絶を含めて、示唆に富む好著が発刊されたので紹介し、少しく書評を加えたい。まず序およ